勇者たちのこぼれ話

天見酒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者たちのこぼれ話

【Ｎコード】
Ｎ１１３２Ｍ

【作者名】
天見酒

【あらすじ】
未熟な物書きがとある稚拙な文章で書き漏らした話や書けなかった話を短編集にしてしまおうと愚考した冒険記のこぼれ話。
短編集にするほどネタはあるのか？
こうして天見酒の愚行は繰り返される！

＊自著『勇者との冒険記』のこぼれ話です。本編を読まないと分からないと思います。

同士殺しになった日

満開に咲く花が春を伝えていた。この時期は特に忙しい。魔物の繁殖期。気の立った魔物による被害は増える。

僕の所属しているシーベルエ騎士団第3独立遊撃隊も連日真面目に任務を果たしていた。

「またぁー！隊長、任務中に酒を飲まないで下さい！」

「分かってないな、ハヤセよ。男は酒をたしなんで強くなれるのだよ！」

本当にそうなのだろうか？確かにラス隊長は任務中にお酒を飲んでも強い。僕も隊長に勧められて試そうとしたけどハヤセ副長に止められてしまった。

「とにかくそれは没収です」

ハヤセ副長がラス隊長から酒の小瓶を奪い取る。

おかしい。いつものラス隊長ならば“ハヤセ、貴様は上官の私物をくすねるのか！”とかの難癖を付け始める筈だ。今日の隊長は不気味な笑いを溢している。

「フッフッフ、ハヤセ君。聡明にしてインテリジェンシ～な俺が毎回同じ手を喰うと思っているのかね！思っているのかねェー！」

「良いから、もう一本出して下さい」

「実はな、今回はもう一本…、な、何故にバレたぁー！こ、この賢明でユーモラスに富む俺の作戦がぁ～！」

ラス隊長はとても愉しそうです。周りの先輩隊員達からも笑いが溢れています。良く思うことだけど任務中に笑っても良いのかな？

ラス隊長が僕に寄って来ました。

「アレン。気を付けろよ」

真面目な顔に戻ったラス隊長。

まさか、魔物が近くにいるんですか。そんなことが分かるなんてラス隊長はやっぱり凄い。

「カイナ人は人の心が読めるんだ。ハヤセはきっと俺が今何を考えているか分かっているんだ」

そんなことをカイナ人が出来るなんて知らなかった。

「今晩は何処の飲み屋の女の子にちょっかい出そうかでしょう？」

「ほれ見ろ！俺の心を完璧に覗かれたぞ！」

本当に人の心を読めるなんて。

「ハヤセ副長、凄いんですね！」

周りの皆から何故か笑いが起きた。

「隊長、アレンに変な知識を吹き込まないで下さいよ。アレン、隊

長の思考が単純過ぎるだけですよ」

ハヤセ副長が僕の頭を撫でながら言った。

「良いか？俺の複雑多岐な頭脳でさえ単純と言ってあしらう奴だぞ。アレンの心を覗くなんてハヤセにとっては簡単なんだ。お前がエルをどう思っているのかとかな」

ラス隊長の忠告に僕は重々しく頷いた。
エルをどう思っているのかなんて自分でも分からないけど、何故か覗かれたくは無い気がしたから。

僕が真面目に頷くとまた笑いが起きた。何でだろう？

「確かに隊長の思考は複雑怪奇とは言えますね」

ハヤセ副長は心が読めるんだと思うと少し怖くなった。
ハヤセ副長から少し離れるとまた笑われてしまった。何で今日は笑われてしまうのだろうか？

でも、悪い気がしない。僕も何だかとても良い気分だ。

そんないつも通りの穏やかな日だった。

「ロッセル！弾幕が薄いぞ！何をやって…！チッ、こいつもか」

ドラゴンが五体横たわる。残りは二体。

ラス隊長に呼び掛けられたロッセルさんは既に返事を出来る状態で

は無かった。

残ったのは、僕とラス隊長だけ。ハヤセ副長の姿は全身が黒くなっていた。

「なぁ、アレンよォー？死ぬ覚悟出来てるかぁ？」

背中を向けるラス隊長が聞いてきた。

「出来てます！」

ラス隊長、お願いですから死ぬ覚悟何て言わないで下さいよ。

「そうか！」

ドラゴンの吐く炎。隊長がその炎スレスレを走る。そして、ドラゴンの足元を斬り付ける。

そのドラゴンはバランスを崩した。

僕は魔力を移した剣でそいつの首をはねる。

ドラゴンは倒れる。

やった！

その僕の背に触れるもの、ラス隊長の大きな背中だった。

「よし、アレン、良くやった。しかし、ちと背中がお留守だったな」

ラス隊長の足元にボタボタと散らばる落ちる赤い液体。

ラス隊長を襲ったドラゴンの爪の跡だった。

「ボケッとしてんな！行け！アレン！」

思考を止めるしか無かった。何も考えずに最後のドラゴンへ剣を振った。

僕はその時、死んでも構わなかった。いや、死んでしまいたかった。

話せるのはラス隊長だけだった。

「アレンよォー？生きる覚悟はあるかぁー？」

「無いです。僕も死にたいです」

ラス隊長は愉快そうに苦しそうに笑った。

「アレン、お前は強い。世界最強だよ」

「そんなこと無いです。ラス隊長達の方が強いです」

ラス隊長は嬉しそうに続けた。

「そうだな。俺たちは強い。そしてアレンは、これからその強い俺たちの志を持って戦ってくれるんだからな。お前の強さは俺たちでもあるんだよ」

ラス隊長は目を閉じた。

「アレン。生きる覚悟は出来てるか？」

その返事を聞くことなくラス隊長は逝ってしまった。

そして、僕は生きる覚悟を決められなかった。

騎士団を抜けて、逃げ出した。

あの人は言った。

「一緒に来ないか」

その人の顔は、ラス隊長に代わって、生きる覚悟を問われているように感じた。

同士殺しになった日（後書き）

初っぱなから少し暗いアレンのお話です。

何故、本編にこの話入れなかったのでしょう。

マズイ、昼休み終わってるぞ！急げ、天見酒よ！課長がまだ戻ってませんよーに。

雪見と酒

マイホームパパ召喚事件が終幕を迎えて、再び俺とアレンは行く当ての無い新たな旅へと出た。
楽しかった。全ての重責から逃れた自由奔放ライフ。ガンデアを回り、ローキーへと行き、カイナへ渡りと世界中を遺跡を巡る旅行をしてきた訳ですよ。

そして、久々に帰って来た我が故郷トーテス。

俺を待っていたのは我がお母様による。大説教でした。早く定職に付き、嫁を貰いなさい。とのことです。
それにより実家に居にくくなった俺は学徒時代の俺の逃げ場であった場末の呑み場に一人へと向かう訳ですよ。

俺だって分かってるさ、今のままブラブラしてたら駄目だってことはさ。２０代後半に差し掛かった俺はそろそろ職に就かないといけないことも分かってる。いつまでも旅を続けられる体力は俺には無いしね。アレンは良いなぁ、騎士団からのお誘いが絶えない。俺にもお声が掛かるが、騎士団でやってける自信も実力も無いしね。
また歴史研究に戻ろうかなぁ。視界に入るトーテス高学院に思考が移った。宿屋を継ぐよりは魅力的だ。

「ネイスト！トーテスに居たのか？」

雪に降られるトーテス高学院をボケッと眺めていた俺に後ろから懐かしい声が掛けられる。

「昨晩からね。ユキは仕事か？」

相変わらずの黒いジーンズに黒いコートのシーベルエ騎士団諜報隊中尉殿がそこに居た。

「あぁ、オルセン・ハシュカレらしい人間がトーテスで目撃されたらしくてな。まあ、結局見付からなかったが…」

「それは中々お仕事を頑張っていらっしゃるようで」

お仕事があるのは羨ましいことで。

「うん。他にする事が無くてな。ネイストとアレンは二人で旅に出てしまうしな。…少し、いや、結構寂しかったぞ」

えっと、それはどういう意味でしょう。えっと、それはつまり…いかんぞ、ネイストよ。当初の目的を思い出すのだ。これはニンジャの罠なのだ！そういうことだ。決してドキドキしたりしてはいけないのだ。良し、とにかくユキの上目遣い攻撃を回避しようじゃないか。

「えっと、俺、これから飲みに行くけど、一緒に来る？」

こうして、俺は当初の目的を果たすべく頑張ったのですよ。飲み仲間も手に入れたし。

良い気分の中には気分の悪さも混じるものでして。少し飲み過ぎましたかねぇ。

良いんすよ。俺はフラフラしてれば。まだまだ結婚とかは早いんすよ。相手も居ないしね。アッハッハ！

夜のトーテスに僅かな光を反射しながら静かに降り落ちる雪。あぁ、なんて綺麗何でしょ。こういうのを幻想的と言うのかねぇ？アッハッハ！

「ネイスト、大丈夫か？やはり飲み過ぎたんじゃないか？」

「いやぁ～全然大丈夫だよ？俺は全然平気なのさ！ユキちゃんこそ大丈夫～？」

うん、やっぱり駄目見たいです。意外に視界と思考が回っていたりして。

「私は、少し寒いかもな…」

俺は平気。トーテスの冬の寒さに鍛えられてるからね～。ありゃ？

「こうすれば暖かいかもしれない…、駄目か？」

いや、あのね、そのね、あれだよ。うん、別に良いよ。女性に不意に腕を組まれて密着されちゃったぐらいで動揺するようなヘタレじゃないからね。酒の力は偉大だね。羞恥心が薄れてしまったよ。

「ネイストはまだ旅を続けるのか？」

「ユキも付いて来るか？」

「…付いて行きたい。ネイストと一緒に居たい。でも、私には一緒に行く理由が無いから…。そのだな…」

ユキの吐く白い息が俺の顔に掛かる。ユキの眉目秀麗な顔が近くに有ることを再認識。うん、俺はかなり酔っていたんだ。何に酔っていたかは知らない。

「ユキ、俺の側に居てくれよ。ずっと居てくれよ。そうしたら俺はユキの為だけに頑張るから」

「ネ、ネイスト！あっ、その…だな。これは…」

うん、そうすね。これはいきなり過ぎる。酔っ払った代償だ。酔ってなかったらこんなことは出来ない。ユキをいきなり抱き締めてるなんて。でも、何だろうね。さっきまで、お酒が暴れていた頭がスゥとしてきて落ち着くだよね、この暖かさが。
だから、ユキちゃんが顔を真っ赤にしてあたふたと可愛く困っていても俺は知らないのだ。

近くで見れば見るほどいとおしくなってしまう。ユキが顔をあげると吸い込まれるような黒い瞳には俺が移っている。吸い込まれていた。

俺は、その黒い綺麗な瞳の上に唇を落としていた。その暖かい感触から唇を離して気付く自分の驚くべき行動。おかげでお酒様のご利益は何処かへ消えた。
俺の顔が赤いのは酒のせいに出来ない。すげぇ恥ずかしい。でも、ユキを離せない。

「ネイストの側にいる！私はずっと側に居るからな。側に居させて」

ユキの顔が上がる。お互いの吐息が掛かる位置に。
ウワァ、何でこんなに近くに有るんだよ。
不味いんだって、俺にとっては綺麗過ぎるんだよ。
今は朱色の入り交じった純白の肌に降る雪に濡れて輝く漆黒の髪。
髪に負けない黒い瞳が俺の側にある。形の整う鼻や眉も。そして、
紅など付けない癖に紅く染まる唇が側にあった。お互いにより側へ
と近づいた。

その後？
何も無かったよ。うん、何も無かったよ。本当に無かったよ？
この話はもう止めよう。

俺に嫁さんが出来ただけです。もし、息子が出来たら酒と女には気
を付けろと教えよう。もし娘が出来たら、酔っ払った男には気を付
けろと教えよう。

結局、俺はユキには勝てないと言うことだ。

雪見と酒（後書き）

皆様からの質問と希望の多きライシスとユキのくっつくシーンを書きました。

うん、俺は何を書いてるんだ。あー、こんなのではダメだ！
この話はもう少し腕が上がったら再挑戦したい。
乞うご期待を！

ライシス・ネイスト　賢者への軌跡

当本を読もうと手に取った方は勿論、シーベルエ、いや、この世界に住む言語を理解できる人間ならば、まずこの名を知らないという事は無いだろう。聖女ニーセ・パルケストに仕えし聖戦士、大賢者ライシス・ネイスト。
当本では、私が研究した彼の偉大なる功績を次の世代へと残す為に書き記したいと思う。

まずは、彼の辿った生涯を簡潔に纏めて見よう。

シーベルエ暦１２１１年、学問都市トーテスの宿屋を営む父シーム・ネイスト、母アーナ・ネイストの長男として誕生。温厚で純朴な少年と評される一方で、あの大戦術家スミル・マードンを８歳にして、知恵で破るという類い稀なる頭脳の持ち主でも有った。

１５才にはその頭脳を用いて、難関トーテス高学院歴史科を易々と突破。
彼は学徒時代にリンセン・ナールスを熱心に研究していたらしい。まるで、自らも歴史に名を残す大英雄になることを預言していたように。

そこでは彼の知的好奇心は満たされず、３年後にはトーテス研究院へと歩む。しかし、そのシーベルエ最高峰の研究院でさえ、彼の才能を収めるには小さ過ぎた。一年後には彼はその才能を試す為に研究院を辞め、旅に出る。

その二年後の彼が２１才へとなった時だった。あの有名な賢者と勇者の出会いが起こったのは。これに関しては後章で詳しく述べよう。

そこから、まるで神に導かれる如く彼はナールスエンドへ向かい、リンセン・ナールスから魔剣ペグレシャンを譲り受け、それを改心した勇者アレン・レイフォートへと託す。

その後、ガンデアの脅威を予期したライシス・ネイストは聖都ルンバットを守る為にシーベルエ国王に働きかけ、自らも新たな聖戦士達を連れルンバットへ向かう。

これが運命の出会いをもたらした。同じくガンデアの脅威から世界を守る為に聖都に居た“ガンデア革命の聖女”ニーセ・パルケストとの出会いである。ライシス・ネイストは、聖女の崇高なる思想に心を打たれ、聖女の理想を叶える為にその大いなる智力を尽くす事を誓う。

彼は歴史へと姿を表す大前提である。

そうして、レッドラートの乱を故郷トーテスにて、天候や大地を操り、いとも簡単に収めて“天道の賢者”の名を欲しいままにし、国境での聖女による“世界愛の大演説”を行わせるべく尽力する。

そして、今は無きガンデア国の首都グルアンへ赴く。

伝説の再現、悪漢クレサイダにより召喚された凶悪なる魔王。しかし、魔王もリンセン・ナールスを超える人物がこの世界に居ようとは夢にも思わなかった事だろう。同行されたシーベルエ国王は語られた。大賢者ライシス・ネイストの紡ぐ魔法は素晴らしかったと。

その一撃にて魔王の戦意は既に削がれていた。

ライシス・ネイストの前にひれ伏し命乞いをする魔王。その魔王の無様な姿に大賢者のその大きなる懐は魔王を許し、ヘブヘルへ帰すという慈愛に満ちた偉大なる判断を下した。

その後、シーベルエ国憲章、騎士団名誉職を“私が貰えるものではありません”と謙遜して辞退し、ライシス・ネイストは勇者アレン・レイフォートと共に一時姿を消す。彼は知識を満たす為にまた旅に出たのである。

そして現在彼はその旅で、さらに増した彼の大いなる叡知を継ぐ次代の賢者達を育てるべく、トーテス高学院にて教職についている。

これがライシス・ネイストの概暦である。
次章からは、この彼の偉大なる功績の詳細を記していこうと思う。

「リセス、飯だぞ。おっ、勉強か、偉いな！何、読んでんの？」

「あっ、それは…」

お父さんは歴史の本は好きだけど自分の事が書かれた本はあまり好きじゃないんだ。

「うん、あー、良いか、リセス。俺はこの本に書いてあるような人物じゃあないぜ」

お父さんはまたそう言って誤魔化すんだ。だから、僕は図書館で借りて来た本でしかお父さんの凄さを知れないんだ。

「まぁ、もうちょい大きくなったら分かるさ。ユキが待ってるし行くぞ」

お父さんは僕の頭を撫でて部屋から出て行った。何故か少し寂しそうに見えた。僕は、まだお父さんの気持ちは分からない。

でも良いんだ。僕も直ぐにお父さんみたいに凄く強くなって、アレンさんみたいな勇者とニーセさんみたいな聖女や色んな仲間達と凄い冒険をしてやるんだ。そうすれば、お父さんの気持ちだって分かるさ。

闘い続ける英傑達

幻霊界フォートン。ここでは望む物が何でも手に入る。金、趣向品、たいていのものはですがね。ここに居る人達が一番欲しい者は、今では、絶対に手には入らないでしょう。

「それで君はどう思いますか？ラスウェル君」

「俺はどうでも良いけどよぉ。ジンの兄ちゃんよ。ところでさぁ、マジでアレンがあのペグレシャンを手に入れたのか？というか、そのネイストとか言うガキはアレンに変な意味で手を出してねぇよな。あいつ、女みたいだからよ」

「私も彼らを一目見ただけですからね。そこまではわかりませんよ。そこの彼の方が詳しいと思いますよ」

目の前で赤髪の男を睨む大男に回させて頂きます。最も私達の話なんて聞いてないでしょうが。

ラスウェル君は、不機嫌そうにグラスを煽る。本当に彼等は今何をやっているのでしょうかね？ジンサは何をやってるんでしょう？兄としては、そろそろ素晴らしい女性と出会っていて欲しいところですが。まぁ、あの朴念仁では無理でしょうね。

「ハッ、てめえの部下も可愛げが無けりゃあ、上も上だな。素直に敗けを認める度胸もねぇのな！」

「これは我の部下が大変失礼をしたようだ。どうも、我が部下はそなたと違って品が有りすぎてな。品の無い人間の言動を理解出来んのだよ。しかし、そなたの部下とやらを見てみたいものだな。さだ

めし上官がこれでは、苦労人もしくはよっぽどのお気楽人なのでしょうな」

「舐めるなよ。俺の部下は優秀な奴らばかりだ」

確かにご優秀でしたよ。そして、あの二人を纏めていた貴方もね。私も彼処まで華麗に立ち回られるとは思っていませんでした。ハシュカレ君達と違って貴方達を逃がす予定は無かったんですけどね。

「それは良いことだ。そなたのような粗暴な者がクーレに大勢居たら、クーレの王も大変であろうな。そして、我の後を継いだイルサがクーレを容易く征服した後の統制が大変であろうな」

また、二人の話が原点へと帰るようですね。

「それは、てめえに似て娘さんもはた迷惑な性格になっちまったもんだな。俺の性格まで可愛いいミシャとは大違いだ！」

「ハッ！どうだか分からんでは無いか。今頃、そなたみたいに末端の兵士になっているかも知れんぞ？それに比べて、我がイルサはどうだ。可愛らしさの中に高貴な品を持った素晴らしい女性になっているだろう！これは断言出来る！」

結局、貴方達は娘の自慢合戦になるのですよね。

「それこそ、どうだか！ミシャはとても良い子だ。しかもとても美人に育ってるに違いないな」

それを聞いて魔王はそれがどうしたと鼻で笑う。完全に上から目線だ。

「昔、我が凱旋した時に側に寄ってきて天使のごとき笑顔で、“お父様、お疲れ様”と言われた時に我がどれだけ癒されたか？その晩は我と添い寝したのだぞ。恥ずかしそうに俯きながら上目遣いで、たまにはお父様と一緒に寝たいな、だぞ！このイルサの可愛いさはそなたには到底理解出来ないだろう」

「あぁ、そんな父親として当然の事で威張れるてめぇの気が知れねえな。俺なんざなぁ～」

不敵に笑うラベルグ氏。

「大きくなったら私もお母さんみたいにお父さんと結婚したい！って言われたんだぞ」

「なっ、何！くっ、そんな羨ましい事をイルサに言われてみたかった。イルサは我よりもカイムにべったりだったから…」

肩を落とす魔王殿にラベルグ氏が勝利の高笑いを上げてます。なんて、低レベルな闘いなのでしょうか。何とも苛つきますね。

「ジンの兄ちゃん、どう思うよ。この親バカどもは」

「二人とも全く持って分かってませんね」

「おい兄ちゃん、俺のミシャに文句を付けるってのか？」

「レッドラートよ。我の前でイルサを侮辱する事は許さんぞ！」

怒りの矛先が向かって来ますが、私もこの二人の親馬鹿っぷりには

多少うんざりしているので、言わせてもらいます。

「違いますよ。お二人のお嬢様は確かにとても可愛らしいのでしょう。でも、貴方達の考え方が私は気に入らないのです」

この愚か者達に真理を教えてあげましょう。

「子供は皆が可愛いのです！実子出なくても、我が儘であろうとどんな子も良い子達なのです」

ノースライン孤児院の皆は元気でしょうか？きっと、皆立派な大人になっていることでしょうね。

ロットは元気が有りすぎですから少し心配です。メールは逆に内気でしたからね。テドやキリアは私の後を継ぐ立派な騎士団員になるなんて言ってましたけど、うまくやってけているでしょうか？

そんな私の子供達に思いを馳せていると、ラスウェル君からの一言。

「ジンの兄ちゃん、あんたもジンやこいつらに似て、親バカだな…」

貴方だって、アレン・レイフォート君に五月蝿いでしょ。

上品なお誘い

ダンスホールに吊り下げられた豪華なシャンデリア、私には味の分からない高そうなお酒、色とりどりのオードブル。一体このパーティーにどのくらいのお金がかかってるのかなぁ～？
いけないいけない貧乏性だぁ。

「聖女様、私にご一曲お相手下さいませんか？」

先程からこの手の輩が多すぎだよ。まぁ、私の美貌に惹かれちゃうのは、どっかの誰かさんと違って見る目があるって事だけどね～。

「ごめんなさい。私、ダンスは苦手ですので」

あしらい半分、本音が半分。グルアン下町育ちの成り上がり軍人だからね。私はご貴族様方のようにダンスなんてやったこと無いんだよね～。

という訳で、私は壁際で一人ぽつんとしているよ。
今、この会場に居る知り合いなんて、向こうでナンパ中のシーベルエ国王様ぐらいだし。

一応、皆も呼ばれたんだけどね～。ライ君、アレン君はあの時から一年、何処を旅してるか分からないし。
カー君は仕事を言い訳に、今頃ティスちゃんとイチャついてるだろうし。
ユキちゃんはトーテスへの任務が出来て、愛しのライ君に逢えるかもと淡い期待を胸に秘めて飛び出して行っちゃたし。
そんなちょびっと寂しい私に掛かる天使の声。

「ニーセさん！久し振りです！」

「エルちゃ～ん！もう可愛いなぁ～。ドレスがとっても似合ってるよ～！アレン君が見たら惚れ直しちゃうね～」

私のからかいに凄く反応してくれてありがとうね～。顔を真っ赤にして、恥ずかしそうに首に掛けた飾り付きのネックレスを指で遊ぶエルちゃん。この姿をみてると心が弾んじゃうな～。あれ、そう言えばいつもそのネックレス着けてるよね？あらら、これはこれは～。

「もしかして、そのネックレスはアレン君からの贈り物かなぁ～」

少し驚き、僅かにコクりと頷く顔から火を吹き出しそうなエルちゃん。

もうちょっと意地悪したくなっちゃったよ～。

「ロルスの花を象った飾りだね～。エルちゃん、ロルスの花言葉知ってる～？」

フフフ、黙っちゃうところを見ると知ってるなぁ～。ロルスは丈夫な蔦科の植物で、昔はロープ代わりに使われていたほど。で、肝心の花言葉は“切れない繋がり”。二人はどんな切れない繋がりが在るのかなぁ～。全く、アレン君はああ見えて、憎いことやってるねぇ～。どっかの朴念仁とは大違い。

「あっ、ジン隊長ももうすぐ仕事を終えて来ますよ」

何かに鋭く勘づいたように慌てて言うエルちゃん。

「べっつに～。あの男なんか来なくても良いよ～」

私はあんな男の事なんか、全然考えてなかったし。

それはさぁ、シーベルエ騎士団副総長殿は忙しいだろうけどねー。私だって、旧ガンデアに乱立した自治領の領土問題とかの対応で忙しかったんだよ～。でも、シーベルエンスに来たんだよ～。ちょっとだけ、あいつに会いたくなっちゃてさ…。本当にちょっとだけ、だけどね～。

それなのにあの朴念仁は、こんな素敵な美女を待たせるなんて、何処まで愚か者かな～？

「悪い。仕事が立て込んだ」

「ヒャ！…いきなり声掛けるなんて失礼だと思わないの～？」

いきなり現れたから、びっくりしたじゃないの～！胸が高鳴ってるよ～。これはいきなり現れたせいだよ～。私、顔が赤くなってないよね～。

「あっ、私向こうに居ますね」

エルちゃん、変な気を回さなくて良いよ～。というか、この朴念仁と二人きりにしないでよ～。なんか辛いよ～。

「エル、待て」

ホォ～、貴方も私と二人きりは嫌だと。良い根性してるな、コラ！

「さっき、アレンが俺の部屋に騎士団に再入団したいと来た」

「エッ！アレン君、帰って来たの！」

アレン君、タイミングを心得てる～。この朴念仁とは大違いだね～。

「今はラスの所に居るだろう」

それだけ聞くと一心にダンスホールを後にするエルちゃん。もぅ、健気だなぁ～。

残された私とこいつ。私を見てないで何か言ってよ。

「怒ってるのか？」

「別に怒って無いよ～？」

溜め息を付く朴念仁。溜め息を付きたいのは私だよ。

「踊るか？」

ええぃ、なんだそのダンスの誘い方は～！周りの貴族のボンボンを少しは見習え！

「私は、貴方のような大貴族の育ちで無いので、踊りはやったことありませんの～。女性と踊りたいならそこらのお嬢様を誘ったら如何ですか～」

「そうか」

簡単に認めないでよ～。何か私が惨めじゃない。ダンスも出来ないし、礼儀作法だって曖昧だし。貴方と違って場違いだよ私。シーベ

ルエ人でも貴族でも無いし。
少し落ち込んじゃうな～。どうせ私は平民出だ。

「なぁ？」

「何よ～？」

早く他の女性を誘いに行きなさいよ～。貴方の不躾なお誘いに乗るような人がいればねー。

「俺はこういう格式張った場所は嫌いだ。二人で何処かの酒場に飲みに行かないか？」
全く、上流貴族社会の風情の欠片も無い男ね～。でも、少しは女心…、私の心が分かって来たかな～。

「しょうがないから、そのお誘いに乗ってあげましょう。エスコート、しっかりして下さい」

「了解しました」

彼の前に突き出した私の手を取った彼の手は予想してたより、ずっと暖かかった。

上品なお誘い（後書き）

聖女様と朴念仁がくっつくシーンのリクエストを受けて書いたんですが、結局くっついて無いやん。
ごめんなさい。反省します。

こぼれ話中のこぼれ話『勇者との建国記』（前書き）

当作品は勇者との冒険記の原作と言える作品。

勇冒とは様々な設定が異なっています。イメージが崩れるかもしれません。お読みになる際はご注意を！

こぼれ話中のこぼれ話『勇者との建国記』

商人の息子として生まれ、商人の息子として育ち、そして商人として死んでいく。筈だった。
その俺が何故こんな物々しい飾り付きの座り心地は最高だが、居心地が最悪な椅子に座って居るのだろうか。しかも、歴戦の強者達に囲まれて。どうなってるんでしょうねぇ～本当に。

「ではでは～、明日のシーベルエ城進行作戦！発表しちゃいま～す」

元シーベルエ参謀ニーセ・ケルペスト。叡知の聖女と呼ばれた人物。噂には聞いて居たが実際はこんな軽い人間だとはね。ニーセと対面した時から、噂は信じない事に決めた。
しかし、実力は折り紙付き。その戦場での的確な采配は未だに一回しか破られていない。また、魔法の行使においても、彼女に秀でる者はそうそう居ないだろう。
そんなシーベルエの聖女様は故有って、今は俺の元に居る。おかしなもんだね。

「まず、様子見にレッドラート隊が適当に突っ込んで、適当にやられちゃって下さ～い」

「弓兵隊に最前線に出ろと本気で言ってるのか？それとも、ふざけてるのか？」

「ハハハ、冗談だよー。貴方一人で突っ込ませたいな～」

不敵な笑みを浮かべニーセの視線の先にただ座り真っ直ぐな視線を向けるジン。一触即発な状態。

「作戦参謀殿、真面目にやってください」

良く言ったロンタル宰相。こいつらが痴話喧嘩を始めると長くなる。

「はぁ～い。先鋒はカー君とアレン君の隊に任せるよ～。シーベルエ城、城門前でしばらく耐えてて～、レッドラート隊はその後ろで無駄弾撃っててよ」

「了解した」

いや、無駄弾撃ってたらいけないでしょう。

「僕に作戦は必要無い。ラベルス将軍の敵を討つだけだ。魔将クレサイダ以外に興味は無い。そちらで勝手にやってろ」

相変わらずチームワークの欠片も無い奴だな。

「カ～ぁ君？お仕置きしちゃうよ～？」

肩が震えるカー君。元シーベルエ最強の剣士殿もニーセにだけは弱い。ニーセの言うお仕置き…うん、想像しないようにしよう。

「クレサイダはカー君に任せるだから、俺たちに手を貸してくれ」

「まぁ、良いだろう。ネイストに今回は手を貸してやるよ」

俺の価値の無い頭を下げた価値は有ったようだ。まぁ、カー君はこれでオッケイだな。

「じゃあ、次はベーテちゃんの小隊だけど、タイミングを見て私と一緒に城の右から攻めるよ～。私が城壁に派手に穴を空けるからベーテちゃん達は城門へ直行して開いて～。重要な役割だよ～」

「はい！この命に変えても、陛下の為に血路を開きます！」

「いやいや、ベーテ。頼むから命に変えないでくれよ」

俺にそんな重いものを背負わさないで！

「陛下、私ごときにそのお心遣いを…、そこまで私の事を思って頂き、私は…」

いやいや、貴女には何度も助けられてるからね、俺。そんな眼を潤ませて赤ら顔で俺を見ないで。陛下は凄く心苦しいです。

「盗賊上がりにそんな大役が務まるのかな？」

俺の後ろで気配を殺して立っていた女の声に俺はびっくり。俺の命が縮むから、後ろに立ってないで席に着こうよ。

「クロツキ、貴様こそこの戦闘に紛れて再び陛下を暗殺を企てているのでは無いのか？元暗殺者？」

「なっ！私は身も心も陛下に捧げたのだ！そのようなことをするわけが無い！」

あれ、そうだっけ？アレンが側に居たお蔭で助かったユキちゃんの暗殺未遂。俺が彼女の隠密と剣の才能に“俺はお前が欲しい。俺のところに来ないか？”と勧誘したところ、照れ始めて“そんな事を

急に言われても、その困る。その、私の心の準備がだな”と、はぐらかされて流れたままだった筈だけど。まぁ、いつまでも俺たちの陣営に居るって事は、今では立派な味方なんだろうけどね。

「なっ、身を捧げた！それはどういう事ですか、陛下！」

えっ！なんで俺がベーテにキツく詰問されてるの？

「ハイハイ～。ベーテちゃん、落ち着いて～。作戦は以上。細かい指示は明日、状況を見て送るからね～。陛下、問題ある～？」

「全く無い。ただし、明日は俺はアレンの隊に同行する。城門攻めの部隊は目立った方が良いんだろ？俺自ら出てってやるよ」

文句付けようにも俺って、戦術が全く分からないからニーセに任せるしか無いんだよね。でも、これは譲れない。皆が戦場に出るのに一人だけここで茶を飲んでる気は無い。

ロンタル宰相が咳を一つ。分かってますって。

「危険は承知してるし、出ても何にも出来ねぇのは分かってるんだけどよ。仮にも一国の王だぜ。堂々とした姿を見せてやるよ」

実際、戦場に出たく無いんだけどね。怖いから。

寝れない。明日の戦いが勝利に終われば俺は正式にシーベルエの王になっちまう。俺が王だぜ。あり得ないけどあり得ちまう現実。なりたく無いけど、ここまで来て引き返す訳にも行かない。死んでいった仲間達の為にも。

「陛下、入ります」金髪と金色の瞳が灯りを落とした野営テント内に現れる。

「アレン、陛下は止めてくれ」

畏まる幼なじみな剣士様には苦笑いがもれる。

俺の誘いにやっと乗り、俺の隣に座った剣士様。

「えっと、ライ兄。それで…何か用かな？」

アレン、その上目遣いはわざとかな？君は少し自分が男にいつ襲われてもおかしく無い顔立ちだと言うことを理解した方が良いよ。

「あー、何か明日で終わっちまうだなぁーと」

無言で頷くアレン。

「明日でライ兄は国王だね」

「あぁ、うん。俺みたいな一般庶民がね～」

うん、言いたい事が言えない。辛いね。昔なら、ガキの頃なら、こいつにもっと素直に言えたんだけどね。

いい加減に覚悟を決めろ、ライシス・ネイスト。良し！行くぞ。

「アレン！」

俺のいきなりの決意の呼び掛けに驚くものの、真っ直ぐと俺の顔を見る金の瞳。

「えっと、アレンと二人で旅してた時は楽しかったなぁ～なんて」

アレンの綺麗な瞳に決意がポッキリ折られました。情けない俺。

「うん、あの頃はライ兄と二人きりだったね。でも、今は忙しくてこうして、二人きりで喋れないね」

もしかして、それは寂しいって事か。うん、そういう事だ。可愛い奴だなぁこいつは。良し撫で撫でしてあげよう。そして、いい加減に覚悟を決めよう。

「あの、だなぁ～。これが終わったら、旅に出ないか？二人で。今なら贅沢な旅が出来るぞ。…その、新婚旅行代わりに…」

「へ。エッ！新婚旅行って、僕とライ兄は結婚してないし！」

「だから、そういう意味なんだよ！」

「デッ、でも、僕はライ兄以外の皆に男だって嘘付いてるし」

「本当の事を言えば良いだけだろ。別に誰も責めねぇよ」

お互いにテント内が暗くて良かったな。俺の顔も真っ赤なら、この少女の顔も真っ赤だろう。

「僕で良いの？ライ兄は国王になるんだよ」

「お前で良いの。お前は王妃になるんだぜ。嫌か？」

全力で首を振るアレン。その後は恥じらい下を俯き黙り込む可愛いアレン。ネイスト軍の勇猛果敢な名将アレン・レイフォート形無しだな。

うん、まぁ、あれだ。俺にとってはシーベルエ城の玉座なんかよりも、素敵な御褒美も出来たことだし、明日は張り切っちゃおうかな。

こぼれ話中のこぼれ話『勇者との建国記』（後書き）

三年前、大学の授業中に真面目に書いていた作品の一部。これが勇冒の基盤となっています。

アレンが男装してる女の子だったり、ライシスが国を創っちゃたり、まぁ、凄い設定だったんですね。悪い意味で。

訳ありで色々と設定を弄ったのが勇冒になった訳です。久々にノートを発見。少し改変して載せました。

家族（前書き）

ライシスとアレンが出会うより少し前の、カー君のお話。

家族

ノックもせずに扉をあける無礼の代名詞な先輩。

「たっだいま～！」

他人の家に上がり込むと言うのに、厚かましすぎやしませんか？普通はこう言うべきでしょう。

「お邪魔します」

「カーヘルよぉ、遠慮し過ぎだぜ」

「そうだよ～。カー君。礼儀も過ぎ足るはなお、及ばざるが如しだよ～」

何故に、ニーセさんではなく、自分が攻められるのか分からない。ここの家主も礼儀をわきまえ無い人だからでしょうけど。

「カーヘル、せっかくの壮行会なんだぜ。パァ～とやろうぜ！」

どちらかと言えば僕たちは壮行される方。しかも、壮行を手放しで喜べる仕事でも無いでしょう。シーベルエにこそこそと入って、泥棒の真似事をするなんて。あまりにも気が進まない。

「あっ、ニーセお姉ちゃん。カー君も」

何故、ニーセさんにはお姉ちゃんが付いて、僕はお兄ちゃんではなく、略称君付けなのか？ニーセさんの教育の賜物です。

「ミシャちゃ～ん。我が可愛き妹よ～。逢いたかったよ～」

自室から顔を出した上でニーセさんに飛び付く隊長の愛娘。ニーセさんに抱き抱えられて、素直に撫で回されている。貴女の妹では無いでしょうに。

「よしよし、良い子だ。ミシャちゃんはニーセお姉ちゃんみたいに、素敵な女性に絶対なるよ～」

「人の娘を間違った路に踏み込ませるなよ」

笑いながら、椅子に腰を下ろす隊長。久しぶりに隊長がまともな指摘をした。確かに自分の娘がニーセさんみたいになったら、父として苦労が絶えないでしょう。

「アラッ。タイミングが良いわ。ちょうどメインディシュが焼き上がったところ。直ぐに準備するからね」

「あっ、教官、手伝いま～す」

五人で囲むには少々狭いテーブルに皿を並べ始めるルーシャさん。ニーセさんがミシャちゃんを放して手伝い始める。僕も何かした方が良いでしょうか？

「カーヘル、まぁ座ってろ」

手持ちぶさたな僕は進められた椅子に座るが、落ち着かない。隊長の家には何度かお邪魔しているけど、やはり何かが慣れない。この狭いダイニング。高価な物など飾ってある訳でも無く、眼を逃がすのは生活感のある家具ぐらい。これが庶民の家庭的な家ってものな

んでしょうが、貴族出の僕には不思議な空間でしかない。

「ヨイショ」

僕の膝に感じる感触。ミシャちゃんが笑顔を向けながら、可愛い掛け声を掛けながら、僕の膝に登ろうとしている。前に僕の膝に座らせてから、気に入ってしまったのか、僕が隊長の家に御呼ばれした時のミシャちゃんの特等席となってしまった。だから、今回も脇下を抱えあげてから座らせてあげる。この手際にも、なれてしまった。

ミシャちゃんにはご満足頂けたようだ。隊長もミシャちゃんを眺めながらご満悦。

「また、ミシャちゃんはカー君の元へ～。お姉ちゃん、悲しいよ～。カー君、私のミシャちゃんを返して～」

僕の正面の席に座り笑顔満面で嘆くニーセさん。貴女のものじゃありません。ミシャちゃんは賢いから、貴女よりも僕の方が正しい大人であるという事を分かっているのですよ。

「あら、またカーヘル君ところに。ミシャは本当にカーヘル君が好きね」

ごめんなさいね。と続けて謝るルーシャさん。僕は別に構いませんよ。純粋で素直なな子供は嫌いじゃない。誰かさんと違ってね。

「うん！カー君、大好き！ミシャねぇ、大きくなったら、お父さんかカー君と結婚するんだ」

こういう問題発言をサラリとしてしまうのも純粋な所作で。

「全くカー君は相変わらず手の速い事で～。どうしますぅ教官、ミシャちゃんが悪い男に引っ掛かちゃいましたよ～」

水を得たようにニーセさんが言う。女たらしみたいに言わないで下さいよ。

「あらあら、カーヘル君。ミシャを捨てたりしたら駄目だからね～。しっかり頼むわね？それにしても、ドーヌ家の跡取りを射止めるなんて、玉の輿じゃない？やるわね、ミシャ」

クッ、そうだった。ここには、ニーセさんの歪んだ性格を形成させた一因もいらっしゃる。ニーセさんだけでも、強敵なのに。隊長、助けて下さい。

「まぁ、そういう話はミシャにゃあまだ速すぎるぜ」

さすがは溺娘家です。その通りですとも隊長。貴方はやはり僕の心強い隊長です。

「なぁ、カーヘル。俺の命（娘）を奪うってんなら、てめぇの命を奪われる覚悟は出来てんだろうな？」

お父さん、出来ていませんし、僕には貴方から、命を奪う覚悟は一生出来そうにありません。そんな真剣な眼で見ないで下さい。

「エ～、お父さん遠くにお仕事に行っちゃうの？」

僕から父の膝に移り、父の顔を見上げるミシャちゃん。

「あぁ、そうだ。今度はちょっと長く帰って来れない。良い子にしてろよ」

隊長は大きな手でミシャちゃんの髪の毛を崩す。

「シーベルエに戦争を仕掛けるの気かしらね？私にも復軍召集が来てるし」

ルーシャ・ラベルグ。現ガンデア軍最強最凶の魔術師で、獄炎の魔女と謳われる人物。テンゴル領の違法な地方税に耐え兼ねた農民の起こした争乱。本来、テンゴル側の要請で派遣された彼女が、農民代表に肩入れをし、テンゴル卿邸宅の壁門を吹っ飛ばし、テンゴル卿に減税を脅しと共に認めさせる仲介をした人物。見事に争乱を治めた彼女は、テンゴル領領民からは救世主と仰がれているが、軍はあまり良い顔はしていない。

しかし、魔法においてはガンデアで抜きに出る者が居ない彼女を野放しにすれば、何をするか分からないと言う事で、前線から軍学校の教官へと更迭された。上層部の思惑としては、彼女の魔法能力を受け継ぎ、尚且つ彼女より従順な兵の育成も目的の一つだったと思う。

ニーセさんを見れば、そんな思惑など、ぶち壊しているのは良く分かるが。

「まぁ、侵略行為をやれって言ってるんだ。そうだろうよ。上の方では、既にシーベルエに対抗出来る兵器を得たのか、それとも、また魔王でも召喚しようとしているのかだな。どっちにしろ、禄な事じゃねぇな」

僕たちはその禄じゃない事の片棒を担ぐのか。魔王の召喚なんて馬鹿な事を再び考える事は無いと思うけど、何せ、魔王の剣絡みの仕事ですからね。

「カー君、仏頂面をしないの～。お仕事だよ～？」

「そうだ、仕事をして、給料が入る。汚い仕事が入りゃあ、汚い仕事をやる。そうやって生きる為に食っていくだよ、俺たちは」

隊長の言う俺たちには、僕も入っているのだろう。でも、僕には分からない。汚ない仕事をしなくても、食べていける地位があるから。隊長みたいに汚ない仕事までして、養わなければいけない存在も僕には居ない。

ミシャちゃんが欠伸をしたので、ルーシャさんに運ばれて退室。

「カーヘル、お前はドーヌ領を継ぐんだろ。国の為に、領民の為には御立派な事だ。でもな、俺はな、俺の家族の為ならば何だってやるぜ。それが俺の守れる者だからよ」

でも、僕にはそれは小さなものにしか見えないですよ、隊長。

「でも、国があってこその家族じゃないですか？国が倒れれば、一族も倒れますよ」

隊長が笑う。とても楽しそうに。

「だから、家族を守る為に国を守ってんだよ。俺は」

勤務に不真面目な隊長が言うと嘘臭く聞こえてしまう台詞。この人は、ガンデアなんて眼中に無いんだ。家族を守る事だけの小さな人

物。

「あなた、荷物ここに置いとくわね」

「おぅ、ありがとう。愛してるぞ」

「うん、私も愛してる。明日から気を付けてね」

リュックを持って来たルーシャさんに少し上機嫌な隊長。部下の目の前で、愛を囁かないで下さい。しかも、軽い口付けまで。こっちが照れますよ。

「ニーセもしっかりね。絶対ここに帰って来るのよ。後は、せっかくシーベルエに行くんだから、良い男を釣って来なさい」

「エ～、私にはカー君が居るから良いよ～」

「そんな事を言ってると何時までも結婚出来ないわよ? 私みたいに美人なのに何で嫁の貰い手が付かないのかしら」

貴女の譲りの性格が最大の問題なのでは…。多分、何処かにニーセさんの性格に対抗出来る、隊長みたいに大雑把な人が居ますよ。

「それから、カーヘル君。凱旋会も家でやるからしっかり帰って来るのよ。シーベルエの女の子に悪戯しちゃ駄目だからね?」

「そうだよ～。カー君。私やミシャちゃんを侍らして起きながら、無垢な女の子を更なる毒牙に…」

「そんな事は断じてしません!」

一人の相手でも大変なのに、二人同時なんて荷が重すぎます。誰か他にニーセさんに弄ばれる対象が欲しいところですよ。隊長、煙草吸ってないで助けて下さいよ。

「皆、ちゃんと戻って来てね」

ルーシャさんが真剣な顔付きになる。隊長、僕、ニーセさんの顔を見ながら。

「また、家族みんなでこんな食事がしたいわ。だから、頑張ってね。お父さん？」

「あぁ、まぁ、でっかい娘や息子は任せておけって。ミシャをしっかり頼むぜ」

でっかい息子とは僕の事なのだろうか？僕は何時からラベルグ家に組み込まれたのか？ニーセさんは既に当人了承済みのようだけど。

大雑把で力押しな父、美人で聡明で少々お茶目な母、根は優しいのだけど少々底意地の悪い姉、年が離れていてお兄ちゃんっ子な可愛い妹。そして、真面目な青年である僕。

とても騒がしい家族になりそうだ。僕が精神的に過労死しそうだ。でも、それほど悪くはなさそうだ。

この任務が終わったら、ここでこの人達と凱旋会か。そう思うと、嫌な任務が不思議と頑張れる気がする。

早い所、魔剣ペグレシャンを奪い、ここに家族みんなで集まりたい

と思ってしまう。
僕は、隊長が国なんかどうでも良いから家族を守りたい気持ちを、少しだけ知れたような気がした。

ライシス・ネイストの人物録（前書き）

リセスの冒険が始まるより少し前に、ライシスが極秘に書いた物の中の一部抜粋。

ライシス・ネイストの人物録

アーナ・ネイスト（６３）

俺のお袋。トーテスにある宿屋ネイストの美人女将の座をようやく娘に譲った、お客には器量の良いお婆さん。個人的に言えば、魔王よりも怖い人間である。

アレン・レイフォート（３７）

俺の義弟にして、俺が認める世界一の勇者。現在、シーベルエ騎士団第３遊撃隊隊長。本当に立派になって愚兄としては嬉しい限りです。ただね、成長したら、美青年と言うより、美女に近い顔立ちになっちゃうところが、こいつの悩み所何だろうね。

アンリ・ネイスト（３９）

昔はお兄ちゃんっ子でどうしようもなく可愛かった。でも、子供を身籠ってから段々、母親に似て逞しくなってしまった俺の愛すべき妹。

ウェルセン・ロンタル（４８）

シーベルエ王国執政官長にして、現国王のお目付け役。あの国王の元でこの国が持っているのは、偏にこの人が日夜頑張って居るから。あの国王には、この人の爪の垢を煎じて飲んで貰いたい。

ウォッチ・レッドラート（享年３９）

元シーベルエ北方騎士団隊長。一度だけ面識があるが良くは知らない。しかし、良い人だったのだろう。彼の治めていた街ノース出身者には、俺を臆病者のペテン師だと、正しい見解を持っている人が多く居る。

エルシア・スベルク・レイフォート（３７）

アレンの嫁さんで俺の義妹。とっても良い娘。ジンが溺愛してたのも分かる。今は、治癒魔法研究の第一人者、そして、一児の母として奮闘中である。

オルセン・ハシュカレ（４３）

ニーセに届かぬ想いを持ち続けるストーカーヒョロメガネ。ニーセに騙され続ける哀れな男でもある。魔鎗エレウクイと共に行方を眩ましたお尋ね者。何処で何をやってるのだか。

カーヘル・ドーヌ（３８）

ガンデアが崩壊し、自治国となったドーヌ自治領初代領主。立派な身分を持つが、実態は奥さんの過度な愛に縛られ、聖女に玩ばれ続ける哀れな男。頑張れ、カー君。

キリア・ノースライン（２５）

俺の優秀な生徒にして、一番俺を嫌う生徒。しかし、俺の戦術指導のお蔭で、その若さにして、北方騎士団の副隊長の地位に着く自慢の生徒。ウォッチ・レッドラートの心酔者。

クーセリング・シーベルエ（４７）

現シーベルエ王国国王にして、大の女好き。未だに俺の愛妻を口説こうとするとんでも無い国王である。まぁ、ユキちゃんは俺とラブラブだから、こいつに靡く心配なんか無いけどね。

クレサイダ（不詳）

二度に渡り、この世界に危機をもたらした大奸雄。魔王様には従順な配下。英雄おっさんを葬った、黒々うねうね野郎。

ケルック・ラベルグ（享年３８）

歴史に残らなかった大英雄。良い人だった。叶うなら、また一緒に酒を飲み交わしたい。

コーレイヌ（不詳）

度々俺がお世話になったフィフレのカエルのじいさん。俺の命の恩人と言って過言では無い。

シーム・ネイスト（６５）

妻の尻に敷かれるドケチ親父。唯一、息子に似て、懐が広い時があることが尊敬出来る点である。ちなみに、その息子は親に似ずに愛妻の尻に敷かれていることは決して無い、筈である。

シールテカ（不詳）

６００年前にこの世界を滅ぼそうとしたヘブヘルの魔王。それから、６００年間何が有ったのやら、大変丸くなられて、今はヘブヘルで、奥さんや子供と楽しくマイホームパパとして過ごして居る事だろう。

シロク・コンス・ネイスト（４１）

宿屋ネイストの長男が放蕩息子ということで、雑貨屋から養子に入れられた宿屋ネイストのオーナー。兄の居ぬ間に妹を寝取るという、許し難き極悪人である。

ジンサ・レッドラート（４８）

俺の頼りになる兄貴分で現シーベルエ騎士団総隊長。その騎士団で認められる威厳ある権威も、未だに微妙な仲の良さな愛妻と溺愛する娘の前では通用していない。

スコルト・レッドラート（７１）

元騎士団総隊長にして、とても上品紳士なお爺様。寡黙なジンとは違って、豊かな社交性があり、本当に血の繋がった親子かとしばしば思うが、愛孫の溺愛っぷりを見ると、この親子の繋がりをはっきりと確信する。

スミル・マードン（享年７０）

シーベルエで俺以外に勝てる者は居ないと言われた戦術家。５年前に亡くなられたが、俺の再就職の口聞きをしてくれるなど、俺の最も尊敬すべき鬼教官。この人に鍛え上げられた俺の足を向けて寝るなど出来よう筈が無い。

セイン・セレミス（享年５４）

この世界に神を喚んだ二千年前の町医者。その人を奉った宗教が出来てしまうのだから、とても良い人だったのだろう。俺も信仰心は無いが、セレミスの恩恵は受けているので、年一ぐらいは祈りを捧げる事にしている。

ティシア・ハシュカレ・ドーヌ（３７）

カー君のお嫁さん。彼女の名の由来であるガンデア神話の女神ティシアナスように、愛する夫の浮気に眼を光らす奥さんです。頑張れよ、カー君。因みに二児の母です。

ニーセ・パルケスト・レッドラート（４５）

この世界で聖女と呼ばれる悪女。俺としては、いつかこいつの本性を世界に公表したいところだが、まだ死にたく無いので止めておこう。ジン、頑張ってくれ。

ニンジャ野郎（本名共に不詳）

俺の腹に穴を空けた人物。現在、ヒョロメガネと同じく世界指名手配中。

ブロイッシュ・イーガン（４０）

身の上は、ベーテと同じ元奴隷。今は、ネイスト家でこきつかわれる奴隷。しかし、本人はこの宿屋を結構気にいっているらしい。去年やっと嫁さんをもらった盗賊には向かない奴。

ベーテ・ルーデ（４４）

俺と彼女が出会う五年前に出された奴隷解放令。解放されても、元奴隷には職が無く、盗賊に身をやつしてしまった可愛そうな人。俺と出会い、親父の学資援助もあり、トーテス高学院治癒学部副学部長にまで登りつめた努力の秀才。

マイケン・バース（４８）

ジンと同期入隊のトーテス駐留騎士団隊長。宿屋ネイスト併設食堂の常連さんで、俺の飲み仲間である。

ミシャ・ラベルグ（２５）

おっさんの娘で、俺の戦術指南を受けた後、アレンの隊で魔法士官をやっている。彼女がお姉ちゃんと尊敬するニーセに似ず、素直で純粋な娘である。おっさん、貴方の娘は良い淑女に育ちましたよ。

ユキミ・クロツキ・ネイスト（４２）

俺の愛妻。お袋の言うように、本当に俺には勿体無い器量の良い奥さんです。本当に、美人で可愛くて夫想いで。ユキの良さは書き尽くせないので、ここら辺にしておこう。現在は、育児を終えて、トーテス駐留騎士団の仕事と宿屋の手伝いをしている良妻賢母。

ライシス・ネイスト（４１）

何故か賢者の称号を有する、妻と息子を愛する平凡な男。現在、トーテス高学院で歴史を教え、トーテス騎士団養成所で、マードン教官の後を継いで戦術を教える二足のわらじをはいている平々凡々な学者。

リセス・ネイスト（１８）

母親の英才教育により、父親に似ず、勇気溢れる青年になってしまった自慢の息子。母の後を継いで騎士団諜報部に入隊。立派になってくれたけど、歴史学者の息子と酒を飲み交わしながらの歴史トー

クを夢見ていたお父さんは少し寂しいです。

リンセン・ナールス（享年不詳）

この世界で知らない者無き、魔王を倒した大英雄。実際は、魔王を召喚した愚か者であるが、それを知った俺は、暫くして更にこいつの研究をしてみたくなった。ナールスが何を思って、魔王を召喚し、魔王を送り返したのか？

ルーシャ・ワント・ラベルグ（５４）

おっさんの嫁さんにして、あの世界一最凶の女を歪めて育てた人である。ガンデア崩壊後、ニーセによって娘とシーベルエに移住。現在、シーベルエンス騎士団養成所で、更なる悪女を育てようとしている、ニーセ同様に俺の頭の上がらない人である。ミシャちゃんが良い子に育ったのは奇跡である。

ルク・レッドラート（１８）

昔は照れ屋な可愛い子だったのになぁ。次第に母親に似て、性格が歪んで来てしまった俺の姪みたいな存在。ユキ曰く、我が息子に恋をしているらしい。父親として、息子とのお付き合いを反対するべきか悩むところだ。

レクスター・シークス（享年不詳）

リンセン・ナールスの師であり、魔王と戦うナールスに手を貸した、シーベルエ史上最も偉大な魔法士。それ以外は全くの謎。性別、年齢、その後の事、全く記録に残って居ない人物。かなりお歳のお爺さんで、その後直ぐに亡くなられたが彼の有力説。彼が創った言語変換通訳魔法や船舶自動航行魔法等は未だに世界中で使われており、偉大な魔法学者でもあった。

レクス・ネイスト（２０）

ベーテに師事して、治癒魔法を極めた優秀な俺の甥。しかし、何故か医者に成らず、アレンに頼んで騎士団に入隊。まぁ、ミシャちゃんとの仲が良いのは宜しい事だがね。おっさんの亡霊に呪い殺されないように頑張りなさい。

ライシス・ネイストの人物録（後書き）

勇冒の登場人物のプロフィールみたいになっちゃいました。

魔冒でもやってみようかな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1132m/

勇者たちのこぼれ話

2010年10月8日13時57分発行